

不当支配 (上)

―会議での挙手は、なぜ禁じられるのか―

ジャーナリスト

榎田 秀樹

●かしだ・ひでき 1959年北海道生まれ。ソマリアの難民キャンプや、ボルネオ島熱帯林の先住民に関わる活動を経験。国内外の社会問題、環境問題や人物ルポを手がける。著書に『9つの森の教え』（筆名・峠隆一）、『新しい貯金』で幸せになる方法』など。『世界』『週刊金曜日』でも活躍している。

一月三十日、一人の元校長が地方裁判所で敗訴した。非常勤教員採用試験の不合格に対する損害賠償請求が棄却されたのだ。だが即座に控訴。現役時代から「言論の自由」を東京都教育委員会に訴え続けてきた元校長の闘いは終わらない。(敬称略)

私たちのほとんどは、学生時代の学校長の名も顔も覚えていない。同様に、それら校長だって私の名など覚えようともしなかったであろう。

だが、土肥^{どひのぶお}信雄は別だった。覚えるのだ。生徒が千人いても。そして、毎朝、学校の昇降口に立って一人ひとりに「おはよう！」と声をかける。さらに、校長なのに校長室にいない。土肥は毎日、いろいろな授業

を廊下からニコニコ眺めたり、部活動に参加して生徒と泳いだり走ったり相撲をとった。ときには、担任教師以上に親身に進路相談に乗る。

こんな校長だったから、ある年の生徒による教師の人気投票でも、土肥は二位に倍以上の差をつけた一位だった。だが――。

二〇〇九年三月。東京都立三鷹高校(三鷹市)の校長だった土肥は定年退職した。そして本来なら、ほとんどの校長は六十五歳までの五年間を非常勤教員として再就職するのだが、その二カ月前の一月十六日、土肥は東京都教育委員会(以下、都教委)から、非常勤職員試験の「不合格」通知を受けていた。生徒にも保護者にも絶大な信頼があった土肥がなぜ不合格なのか。

土肥は都教委と闘っていたのだ。

〇六年四月、都教委は「職員会議での教職員の挙手と採決を禁止する」との通知を学校現場に出していた。都教委は「職員会議の多数決で学校運営が歪められぬよう、校長のリーダーシップで教育の質を向上させる措置」と説明するが、これは実質的には「都教委の命令にはただ従え」との通知だった。

だが、この通知に、都教委の圧力を恐れた校長たちは沈黙した。その中でただ一人、「これが教育現場に浸透すれば言論の自由が失われる。撤回せよ」と都教委に真正面から異を唱えたのが土肥だった。

撤回に応じない都教委に、土肥は公開討論を求めた。都教委による理不尽な出来事の数々を講演で公開したりとの闘いを始める。その先に都教委が用意したのが不合格だった。

定年退職後、土肥は、公開討論の代わりに、都教委のやり方を公の場で明らかにするための裁判を起こす。元々は、誰をも巻き込まない一人だけの闘いのつもりだった。ところが、そうはならなかった。多くの保護者や教え子や市民が、「先生を一人にはしない」と、裁判で闘う土肥の周りに集い、裁判を支えているから

だ。その土肥は快活だ――「見ていてください。絶対に都教委を変えますから!」。

言論の自由を必死に守ろうと闘う土肥。その姿に、教え子たちはまだ学んでいる。

生徒を信じ、汗を流す

とにかく熱くて一本気。誰に聞いても、元教え子たちは土肥をそう評価する。その生き方は、二十代には確立されていた。

一九七三年十二月、二十五歳の土肥は、東京大学卒業後に就職した総合商社を二年目で退職した。輸入牛肉を扱う自分の部署の談話がきっかけだった。

「間違っていますよね。だから、上司に『談話は消費者のためにならない。やめるべきです』と訴えたんです。でも『君は若い』と一笑に付されて。同期入社と同僚は沈黙していました。いや、利潤追求の体制の下で、言いたいことを封殺されていたと感じました」

この体験を機に、土肥は教職に就くことを目指すようになる。理由は二つ。

「まず、利潤追求しない仕事に就きたかった。もう一